

氏 名	加 藤 幹 郎
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	論 人 博 第 6 号
学位授与の日付	平成 11 年 1 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	古典的ハリウッド映画の構造と歴史 — ジャンルの生成とヘイズ・コード
	(主査)
論文調査委員	教授 篠原資明 教授 高橋義人 教授 池田浩士 教授 丹羽隆昭 教授 間宮陽介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文「古典的ハリウッド映画の構造と歴史」は、1930年のヘイズ・コード（映画製作倫理規定）成立から、その廃棄にいたる1967年までに製作されたハリウッド・メジャー映画群を主たる対象として、社会的検閲装置の函数としてのジャンル映画の特性をもつばテキスト分析の観点から同定したものである。

本論文は全13章と補遺からなる2部構成を取り、第1部は帰納的方法によってハリウッド映画の10種類の支配的ジャンルの定義を抽出しているが、同時に、変動する社会の要請に応じて日々新たなポリシーの下に製作されるハリウッド映画が必然的にジャンルの静態的規定からはみだす過剰な部分をいかにジャンルの相互補完性の内に補填するか、その歴史の実態をも明らかにしている。第2部はヘイズ・コードがもつとも厳格に運用され、かつ戦時体制化によるハリウッド映画産業の変貌著しい1930年代後半から40年代前半の10年間の作品を対象を限定して、膨大な一次資料を手がかりに、アメリカ映画の生成過程のダイナミズムを解明し、そのモデル化を試みている。

まず第1部を構成する各章において、ハリウッド映画を代表する10種類の映画ジャンル（すなわちフィルム・ノワール、道化喜劇映画、スワッシュバックラー映画、戦争映画、ファミリー・メロドラマ、スクリーンボール・コメディ、恐怖映画、キャング映画、ミュージカル映画、西部劇映画）について合計約450本の個々のフィルムの分析を通じて、それぞれのジャンルの静態的規則、すなわちプロット、主題、技術、イコノグラフィ、そして社会的イデオロギー形成力にかかわる共通パターンを抽出している。そのうえで従来、類型論的考察にとどまっていたジャンル論の陥穽を埋めるべく、ジャンルの生成変化の歴史という動態的分析を加え、その結果、次のことを明らかにしている。

すなわちジャンルは一人の映画作家の作家生命をこえて複数の作家に共有可能なある想像力の型をあたえるが、その一方で個々の作家は、みずからの想像力に応じて独自の主題と構造を産みだす。その独自の主題と構造は作家とスタジオ首脳部が利用する既成のジャンルの型からの偏差というかたちで測定可能な想像力へと還元しうる。測定可能なものへと還元された個々の作家の想像力は総体として検閲や社会状況の変化に応じてふたたび新たなジャンルの型へと鑄直される母型となる。それがハリウッドの映画ジャンルの生成変化の歴史を構成するものである。なぜなら測定可能な想像力へと還元された作家の項がふたたびジャンルの項へと回付されるさい、ジャンルの想像力の型の再定式化が可能になり、その再定式化に応じて作家の項も再度計測し直されるからである。こうしたジャンルと作家の再定式化のプロセスは、ちょうど一人の作家が複数の映画ジャンルを横断するように、ひとつのジャンルから別のジャンルへの焦点移動をとめない、一ジャンルの再定式化は、必然的に各ジャンル間の既存の境界の変更をせまり、映画ジャンルの相互規定が可能になる。本論文第1部は全体としてそうした対象の正確な把握へといたる再計測の試みとなっている。

第2部は第1部の成果を踏まえ、まず第11章においてUCLAリサーチ・ライブラリー収蔵のプレストン・スタージェス・コレクションの膨大な一次資料の分析を通して、①作家（映画監督兼脚本家）の芸術的意図、②ジャンル（スクリーンボール・コメディ）の規則③スタジオ（パラマウント）首脳部による作家に対する規制とPCA（映画製作倫理規定管理局）に

よる検閲，という三項のダイナミックな関係が実際の映画製作過程においてどのように関与するかを実証的かつテキスト分析的に解明している。

第12章では，第11章で取り上げた作家の同時代人であるフランク・キャブラの人民喜劇とプロパガンダ映画という一見相反する二つのジャンルに通底する話法と主題の一貫性と矛盾を，資料の分析と映画作品のテキスト分析とによって明らかにしている。

最終章においては，ハリウッドが戦後体制を迎えようとするときに戦時中の複数の流行映画ジャンル間の矛盾を一作品内に封じ込めようとした結果，いかに映画作品が製作過程において生成変化するかをジャンルによるジェンダー搾取の観点からショットと編集の分析を通じて解明し，古典的ハリウッド映画分析のモデル化を試みている。

論文審査の結果の要旨

本論文「古典的ハリウッド映画の構造と歴史」は，1930年のヘイズ・コード（映画製作倫理規定）成立から，その廃棄にいたる1967年までに製作されたハリウッド・メイジャー映画群を主たる対象として，社会的検閲装置の函数としてのジャンル映画の特性をもつばらテキスト分析の観点から同定したものである。すなわち，資料体の時期と場とを明確に限定したうえで，一貫した方法論による探求を企てたものである。資料体の範囲の限定と，一貫した方法論的意識は，映画を研究したものとして，本論文に卓越した位置を与えるに十分なものと思われる。

このように，明確に範囲を限定したとはいえ，本論文が検討する映画の数は，およそ450本にも及ぶ。それだけの数の映画を網羅的に検討した結果，ハリウッド映画の10種類の支配的ジャンル，およびその定義が抽出されている。10種類の映画ジャンルの分類，すなわち，フィルム・ノワール，道化喜劇映画，スワッシュバックラー映画，戦争映画，ファミリー・メロドラマ，スクリーンボール・コメディ，恐怖映画，ギャング映画，ミュージカル映画，西部劇映画への分類は，本論文において独自にはじめて試みられたものであり，世界的に見ても比類のないものとして評価できる。

映画の場合に限らず，ジャンル論はえてしてあまりにも静態的になりがちな危険性をもつ。すなわち，個々の作家の特性や歴史的状況といったものが無視されがちなのである。本論文は，作家の特性や歴史的状況を十分に考慮することにより，ジャンル論がおちいりがちな静態性を回避し，映画生成のダイナミズムを取り込むのに成功している。このダイナミズムを取り込むべく，本論文は，次の三つの要素の相互作用を入念に追跡する。まず，ジャンルの規則，第二に，作家の芸術的意図，第三に，検閲を含めた政治的経済的制約である。ヘイズ・コードを視野に入れた本研究は，この第三の要素のありようを明確にするのに，十分に寄与していると思われる。

映画には，おおざっぱにいうと，芸術的側面と，社会的側面がある。まず，芸術としての側面に関して，本論文は，映画学を古典的な芸術諸学のレベルにまで引き上げたものと見ることができる。ある時期のハリウッド映画に研究対象を絞ったことには，たとえば，音楽学がウィーン古典派に範囲を絞ることで得た成果を思わせるものがある。また，ビデオ映像を活用するやり方については，たとえば，美術史学における写真映像を活用した研究を思わせるということもできる。いずれにせよ，そのような資料の検討をとおして，映画を語る言説を，一貫した方法論により整備してみせた点が評価されるべきであろう。本論文におけるジャンル論も，個々の作家によって共有されるはずの想像力の型と見なされることによって，芸術的な性格を担わされている。そういったことどもにより，本論文が提示する映画学は，社会史に還元されない芸術学的品格を備えるにいたったといえることができる。

その一方で，政治的経済的側面を含めた，映画の社会的側面は，ある意味で，他の芸術以上に顕著であると思われる。それは，たとえば映画の大衆性というかたちであられる。本論文における社会的制約の処理法は，大衆との関係という問題に関しても，示唆的である。映画以外の分野における大衆との関連についても，たいへんに啓発的と思われるゆえんである。

映画の芸術的側面と社会的側面に一貫した方法的意識でもって鋭利な視線をそそぎつつ，本論文は，二つの側面を有機的に見すえた，堂々たる論考となりえている。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成10年10月27日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。